

一夜の野宿は、蚊の襲撃であかし、とうもろこしの皮でつくった草履は底は破れ、なわやつるで巻きつけ、気がついてみたら足はふくれあがり、死ぬ思いの逃避行であったが、チチハル到着は地獄に佛であった。

その後、乗船までの長い旅は、大陸の冬の訪れに飢餓と寒さに耐え兼ね、幾度か自決の念にかられたが、故郷の土を踏むまではと齒をくいしばった。このような状況下で、祖父母と妹の三人は途中で倒れ、無念の最期をとげた。

その後一家は病気におかされ、病院船でコロ島より出港、博多港に上陸、帰郷についたが家なく、食なく、着のみのままの私達、引き揚げては来たものの、生活苦が又待っていたのである。

## 生後間もない幼な子を連れての

### 避難行

福島県 安藤 シン

私は昭和十八年十月、安藤文雄と結婚、新京市の陸軍官舎で新婚生活をはじめた。夫は、満州第二航空軍司令部軍属の通信手として働いていた。

生活は軍関係の仕事で、比較的裕福であったが、遠く故里を離れた満州での新婚生活は、どことなくなじめない気持で、すっきりしない毎日だった。

十九年八月十五日長女弘子が誕生し、親子三人幸福な生活を送っていた。二十年八月九日午前二時、突然けたたましいサイレンが鳴り響き、深い眠りからびつくりして起こされた。私達はなにがなんだかわからなかったが、ソ連機の空襲で、無気味なサイレント、キラキラと青白い閃光が夜空に光り、生きた心地がしなかった。ソ連軍の侵攻は、またたく間であり、八月十

三日、軍より家族の疎開命令があり、二時間後に新京駅に集合し、私達三人は、着のみ着のままでリュックサック一つに幼な子を背負い、無蓋貨車に詰めこまれ、なんとか北朝鮮鎮南浦に避難することができた。日本の敗戦を知った朝鮮人は日本人に石を投げたり、なぐりおどしたり、ば倒したり、いろいろな迫害を加えてきた。

私達の部隊は、家族を含め二百余人で、転々と移動し、野宿したことも数多くあった。食糧不足と寒さのため、避難生活十か月の間に、乳幼児の大部分は栄養失調でやせ衰え、声を出すこともなく、死んでいった。二歳になった長女がジフテリアにかかり、病院に連れて行っても、血清が無く、二十一年一月一日、ノドをゼイゼイ鳴らしながら苦しみにぬいて死亡した。日本にいたならば死なせることもなく、皆楽しく正月を祝っていることだろうと我が身の悲しい運命をなげきつづけた。

朝鮮人の捨てた野菜や残飯を粥にして食べたが、やせ細るばかりだった。夫は大工仕事の経験を生かし、

下駄をつくり、避難民に売ったり、私はリング畑に肥料をやる仕事で少しの収入を得たが、ひどいインフレでなんの足しにもならなかった。

私は二人目の子供がお腹におり、身重な体で毎日汗と塵にまみれて働き、二十一年四月十日、次女由美子を荒屋で産婆の世話にもならず、やつとのことで出産した。お産後一か月も経たない五月二十五日、日本に帰る命令が出て、南下することになった。産まれたばかりの赤ん坊もどうなるか心配であったが、鎮南浦を出発し、一つの鍋でご飯を炊き、同じ鍋でオムツを洗ったりした。人間生死をさまよっている時は、原始人にもなったつもりで生きて行けると思った。

三十八度線を越えるまでは、毎日／＼雨が降りつづき、赤土の泥道はずるずるとすべり、まっ暗な闇の中を前の人を見失わないよう歩きつづけたが、女子供達は、極度の疲労のため歩くことができず、親の手で引きずられながら、やつとの思いで三十八度線の街に着くことができた。そこにはソ連兵が待ちかまえ、女性を強要した。みんなの金を集めて、差し出したが、駄

目で、経験のある女性何人が申し出て彼等の要求に応じ、一団はなんとか境界線を越えることができた。引揚婦人のためになった彼女達にはなんと御礼をいっていいかわからない。今でも心から感謝の気持で一杯である。

やつとの思いで京城に到着し、米軍はソ連軍と違い、優しく扱ってくれた。もしあと一か月遅かったら、私達は死に追いやられたことは明らかであつたらう。現在思い出しても血の気が失せる思いで、あの地獄絵は私が死ぬまで忘れることのできない苦難の途であつた。一か月かかって、佐世保に入港したのは昭和二十一年六月二十九日であつたが、ボロボロの衣服をまとい、目だけギョロギョロと光らせ、乞食同然の姿で、やつとの思いで生まれ故郷に帰ることができた。

このあと又生活苦が待ち受けていたことを申し添えて後世に当時の辛苦の一端を申し送るものです。

## ハルビンで終戦をむかえて

東京都 舛谷 スエノ

ハルビンは国際都市で、日本人、朝鮮人、ロシア人、満州人が住んでいました。日本人は約五万六千人だつたと思います。

私の家は、マサヤ理髪店といつて、キタイスカヤ街で理髪店を営んでいたのです。私たち親子五人と職人二人とボーイ一人でやっていました。

終戦の少し前、夫（三六歳）に現地召集がきたのです。私も日頃から覚悟はしていたもののいざ手にした時は、ただぼうぜんとなりました。私は三十一歳でその頃四人目の子供が妊娠五か月になっていました。私達妻子を残して出征する夫もよほど心残りだつたでしょう、その夜、長い手紙を書いていました、それを私に書き残してくれました。

六月十七日の朝五時に、私に、子供達を頼む。みな